

市民と進める 本に親しむ地域づくり



きつ まさあき
木津 雅晟
みさと
三郷市長(埼玉県)



こばやし まこと
小林 眞
はちのへ
八戸市長(青森県)



そのだ ひろし
園田 裕史
おおむら
大村市長(長崎県)



ふかうら ひろのぶ
深浦 弘信
いまり
伊万里市長(佐賀県)

司会・コーディネーター

ふじい
藤井 さやか
筑波大学准教授

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、外出を控える中で、読書の魅力を再認識した人たちも増えていきます。読書が持つ価値を重視し、各種資料の収集、貸し出しなどを行う公立図書館を中心に、市民が本に親しめる環境づくりに力を入れる自治体も少なくありません。また、インターネット通販の普及などに伴い、全国的に書店数が減少する中、本に関する公共サービスを提供する観点から、あえて「公営書店」を整備するなど、独自の取り組みを進める自治体も出てきています。

WEB会議形式の今回の座談会は、本に親しむ地域づくりに力を入れる小林・八戸市長、木津・三郷市長、深浦・伊万里市長、園田・大村市長にお集まりいただき、取り組みの概要と読書活動を普及させるためのポイント、施策を進める上での協働の在り方、まちづくりへの波及効果などについて幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

市民の読書機会を地域でつくる

藤井 コロナ禍の影響でテレワークが急速に普及するなど、オンライン化が一段と進展していますが、学びの手段としての本の位置付けは、今後も変わらないと思います。読書は言葉や知識を学び、豊かな人間性や感性を磨くために欠かせない、最も基本的な行為だからです。

それでは、各都市が進める本に親しむ地域づ

民間書店の淘汰が進む中、「本との偶然の出会い」を市民に提供したいと、八戸ブックセンターを開設しました。



小林 眞
八戸市長(青森県)

くりの内容について、お聞かせください。

小林 八戸市は元来、文化活動が盛んなまちで、私が市長に就任してからも、「アートのまちづくり」を中心に、さまざまな文化事業を進めてきました。さらに、平成26年からは、幅広い世代の市民が本に親しめる環境整備に向けて、「本のまち八戸」の取り組みを推進しています。

これまで、生後3カ月の乳児とその保護者を対象に絵本の読み聞かせなどを行う「ブックスタート事業」、全小学生に市内書店で利用できるブッククーポンを配布し、自ら本を選び購入する体験を促す「マイブック推進事業」、さらには市内の小中学校に学校司書を派遣する「学校図書館支援事業」を実施してきました。

加えて、平成28年には、「本のまち八戸」を推進する拠点として、「八戸ブックセンター」を開設しました。インターネット通販の普及などにより、民間書店の淘汰が進む中、「本との偶然の出会い」を市民に提供したいとの思いから、本の販売機能も持たせた公共施設です。

一般書店では取り扱うのが難しい、需要は大きくないものの、良質な本を中心に陳列販売している他、館内でじっくりと閲覧することも可能です。なお、開設に当たっては、地元書店が有限責任事業組合を設立し、その組合が販売・仕入れ業務を受託する仕組みにするなど、民業圧迫にならない工夫もしています。

木津 三郷市は平成25年、市議会の議決を経て「日本一の読書のまち」を宣言しました。その後、乳幼児から高齢者まで、全ての市民を対象とする「日本一の読書のまち三郷推進計画」を策定し、ノンフィクション作家の柳田邦男先生に応援団長として施策への助言やイベント出演な

どさまざまなご支援をいただきながら、市民が読書に親しむ機会の充実、人と本をつなぐネットワークづくりを積極的に進めてきました。

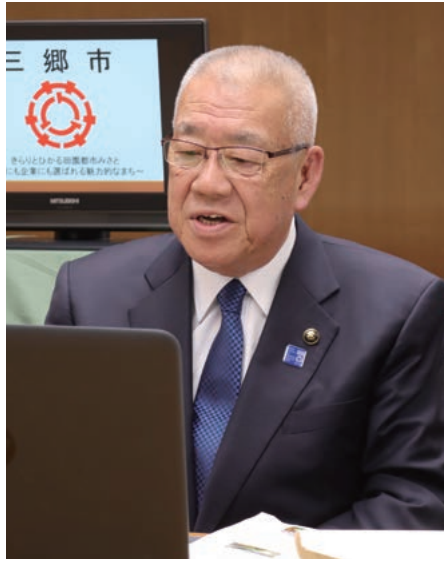
市民に身近な読書拠点として、市立図書館や公共施設に併設された図書室、予約図書受け取りカウンターを含め、市内どこからでも1.5km以内にアクセスできる拠点を8カ所設けています。また、各図書館では各種ワークショップや講演会、講座などを開催している他、平成30年には電子図書館も導入しました。さらに、文字を読むのが困難な方のために、館内にはバリアフリーコーナーとして、音声読み上げ機能を備えたパソコンも設置しています。緊急事態宣言により、施設の利用制限を行っていますが、予



本の販売機能も持たせた公共施設「八戸ブックセンター」(八戸市)

「日本一の読書のまち」宣言を行い、読書に親しむ機会の充実、人と本をつなぐネットワークづくりを推進してきました。

木津 雅晟
三郷市長(埼玉県)



約図書の貸し出しサービスを継続するなど、読書機会の充実に努めています。

他にも、読書で得た感動を絵と文章で表現し、家族へ伝える「全国家読ゆうびんコンクール」では、毎年全国各地から多くの応募をいただいている他、本市が東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとして交流を続けているギリ

シャ共和国とも「読書ゆうびん」を通じた学生間の交流に取り組んでいます。この他にも、子ども読書活動のリーダー育成に向けた子ども司書養成講座も行っています。

深浦 伊万里市民図書館は昨年、開館25周年を迎えました。市が設立した公立図書館は、おおもむね「市立」図書館と呼ばれますが、伊万里市ではあえて「市民」図書館という名称にしています。図書館の設立前から、ボランティア団体「図書館づくりをすすめる会」が伊万里市と協働して、市民参加型の図書館づくりを模索する中で掲げた、新たな図書館の理念「伊万里をつくり市民とともにそだつ市民の図書館」を、図書館の名称にも生かしているのです。

新図書館の開館とともに、「図書館づくりをすすめる会」は解散し、新たに「図書館フレンズいまり」が立ち上げられました。現在、約360名の会員の皆さんが、図書館のパートナーとして、イベントの企画運営、書庫の整理、会報誌の発行など、さまざまな活動に従事しています。およそ四半世紀に及ぶ市民図書館の歴史は、「図書館フレンズいまり」抜きには語れない、というのが正直なところですね。図書館開館から5周年、20周年に作られた記念誌に目を通して、図書館の歩みとともに、「図書館づくりをすすめる会」や「図書館フレンズいまり」の活動が詳しく紹介されています。それだけ、図書館運営にボランティア団体が果たしてきた役割が大きいことを表しています。多くの市民の協力の下で、市民図書館が運営されていることは、大変心強い限りです。

園田 令和元年10月、長崎県立・大村市立一休型の新しい図書館「ミライオン図書館」が市内に



「らんどせるブックよもよも」事業で本をプレゼントされた子どもたち(三郷市)

開設されました。都道府県と市町村が共同運営する図書館としては全国で2例目、県庁所在地以外では日本初となる施設で、大村市歴史資料館も併設しています。蔵書数は現在、125万8000冊ですが、収蔵能力は202万冊で、九州最大級の規模になります。

この新しい図書館の運営に関して、私としては三つの柱を設けています。一つ目は、「市民と創る図書館運営」です。開設前から「伊万里市民図書館」に何度も視察をさせていただき、市民とともに創る図書館を目指しています。

二つ目は「多くの人に興味を持っていただく運営」です。これまで図書館に足が向かなかった人にもぜひ訪れていただきたいと、利用者の



およそ四半世紀に及ぶ
市民図書館の歴史は、
図書館ボランティア
「図書館フレンズいまり」
抜きには語れません。

深浦 弘信
伊万里市長(佐賀県)

興味・関心を引き寄せる仕掛けづくりに力を入れていきます。
三つ目は、「新たな図書館の在り方を生かした運営」です。もちろん図書館ですから、「知の拠点」という大切な使命がありますが、医療や福祉、介護、経済、さらには都市計画といった分野まで、地域づくりに関わるあらゆる物事が、この図書館から生み出され、発信される、そんな情報発信基地としての役割も果たしていきたいと考えています。

本に親しむ市民を増やすための具体策

藤井 では次に、市民へ読書活動を普及させるために、各都市ではどのような具体的な施策を進めていらっしゃるのか、さらに踏み込んでご紹介いただきたいと思います。

木津 三郷市では、乳幼児の段階から本に親しむ環境を整えようと、さまざまな事業を進めています。その一つが、4カ月児健康診査の際に行う「ブックスタート」です。図書館職員が保健師やボランティアと連携し、保護者と赤ちゃんに絵本の読み聞かせを行い、絵本をプレゼントしている他、小学校1年生に、12冊のリストから1冊を選んでもらい、プレゼントする「らんどせるブックよもよも」事業も行っています。

加えて、昨年からステーションワゴン型公用車に市のキャラクターをラッピングした「ふれあいブックワゴン」事業も始めました。司書が選んだ本を載せたワゴンが、保育所や幼稚園、老人福祉センターなどを訪れ、本の貸し出し、お話し会などを行っており、応援団長の柳田邦男先生からもPRなどに後押しをいただいています。

園田 大村市でも、乳児に絵本をプレゼントする「ふるさとこのころをはぐくむ絵本事業」を実施しています。プレゼントするのはブックスタート絵本と「ふるさと大村」をテーマに、市民と協働で作成した大村市オリジナル絵本です。他にも、21の全小中学校に学校司書を配置したことにより、学校図書室の貸出冊数が急増するなど、大きな成果が出ています。図書館では、絵本の人気キャラクターを館内で探すイベントを開催し、多くの子どもたちが来館するきっかけとなりました。

深浦 伊万里市でも、生後3カ月の乳児に、絵本をプレゼントする「ブックスタート」を実施している他、保育園・幼稚園、小学校、中学校、特別支援、公民館など、74もの地点に、移動図書館(自動車図書館「ぶっくん」)で月に1回ほど巡回する取り組みも進めています。さらに、小中学校で朝の読書活動を推進するとともに、家庭での「家読」も推進。このように、学校や保育園、家庭など、さまざまなセクターとのつながりを確保しながら、市民が図書に親しむ環境づくりを進めています。

小林 八戸市でも、市立図書館と連携しながら、「ブックスタート事業」などの取り組みに力を入れてきた一方で「八戸ブックセンター」にお



昨年、開館25周年を迎えた「伊万里市民図書館」(伊万里市)

司書や学芸員とは異なる視点による市民の皆さんの声をヒントに新たな図書館の在り方を模索していきたいです。



園田 裕史
大村市長(長崎県)

いても市民の読書機会の充実に取り組んでいます。「市営書店」とよく言われますが、センターの役割は先ほど紹介したような「本の販売」だけではありません。読書会を行う「読書会ルーム」、本にまつわる展示を行う「ギャラリー」、執筆専用の部屋「カンヅメブース」なども設置している他、ゲストを招いてのトークイベントやワークショップなども随時開催しています。本に関する人材育成もセンターの役割の一つ

です。読書会ルームを利用して、合同歌会を実施した高校生たちが「全国高校生短歌大会(短歌甲子園)」で優勝・準優勝を果たしたり、日ごろからセンターを利用して市民が文学賞を受賞したりするなど、成果も上がっています。

市民や他セクターとの連携・協働

藤井 各都市とも、図書館やブックセンターを中心に、さまざまな施策を展開されていますが、市民協働の在り方も含めて、運営面で工夫されている点もお話してください。

園田 大村市でも、旧市立図書館時代から継続して、ボランティアの協力の下、おはなし会やミニコンサートなどを実施している他、図書ボランティア養成の取り組みも進めています。また、毎月テーマを決めて館内装飾もしていただいています。今、館内には、今年の干支^{えと}にちなんで、牛の人形やモビールなどが飾られ、来館された方が楽しめます。

深浦 全国的に図書館業務の外部委託が増えています。伊万里市民図書館は、「図書館フレンドズいまり」との協働を基盤としながら、あくまでも直営にこだわっています。

市民図書館は、ボランティア団体とは役割や業務内容が異なりますので、一定の距離感を保ちつつも、「図書館フレンドズいまり」が活動の理念として掲げる「協力と提言」を日々受けながら、より良い図書館運営に努めています。

木津 三郷市では図書館ボランティアだけでなく、市民の皆さんにも、市の読書活動に参画いただいています。代表的なものとして挙げられるのが、病院や自動車販売店などで本の貸し出しなどを行う「ふれあい文庫」の取り組みです。



長崎県立・大村市立一体型の新図書館「ミライon図書館」のエントランス(大村市)

この事業は市民からの寄贈本も活用させていただき、多くの市民の協力のおかげで、その拠点は7カ所に増えました。

また、令和元年に青年会議所と協力して実施した、参加者が本を持ち寄って交換するイベント「ブックエクステンジ」に参加しましたが、多くの市民に会場いただき、「1時間にブックエクステンジを行った最多人数」(539人)として、ギネス世界記録を達成するなど、大いに話題となりました。

小林 八戸市でも、本の読み聞かせなど、図書館やブックセンターの各種事業において、多くの市民に協力いただいています。それだけではなく、市内の飲食店や寺院などでも、

独自の本棚を設置している他、市内に立地する大手製紙会社も工場見学やブックセンターの企画展を通して、「紙が本になるまでの過程」を市内の方々に伝えてくれています。このように、さまざまな主体が、「本のまち八戸」の取り組みを後押ししています。

図書館・ブックセンターを地域活性化に生かす

藤井 図書館やブックセンターはまちの顔であり、人と人との出会いの場でもあります。図書館・ブックセンターがまちづくりや地域活性化に果たす役割、さらには今後の展望などについてお話しただければと思います。

小林 八戸ブックセンターの方針の一つは、「本で『まち』を盛り上げる」こと。具体的に言えば、中心市街地の活性化です。ブックセンターも中心市街地に立地していますが、その隣には、平成30年に設置した屋根付き広場「八戸まちなか広場マチニワ」があります。さらに、その向かいには、平成23年に開設した、市民活動の拠点施設「八戸ポータルミュージアムはっち」が立地しています。加えて、本年秋ごろに、新しい



藤井 さやか
筑波大学准教授

市立美術館も開館予定です。このように、中心市街地に集客力のある市の文化施設を整備することで、まちのにぎわいが創出されています。

園田 「ミライの図書館」は、地域の商店街に隣接しています。こうした環境を生かして、地域自体を盛り上げる施策も展開したいと考えています。例えば、子どもたちが図書館でお金や経済の仕組みを学び、商店街に出て、地域の人と触れ合いながら、物品の販売体験をする。このように、図書館と地域が連携し、子どもたちの学びにもつながられるような施策にも積極的にチャレンジしたいですね。

さらに、従来とは異なる図書館の可能性を見出すためにも、市民から具体的な提案をいただきたいと思っています。司書や学芸員とは異なる視点による市民の皆さんの声をヒントに新たな図書館の在り方を模索していきたいです。

木津 高齢化が一段と進む中で、高齢者の外出機会をつくることは、今後のまちづくりにおいて、大きな課題です。その意味でも、市内各地に読書の拠点をづくり、市民が本に触れ合う機会を創出してきた本市の取り組みは、高齢者の生きがいづくりとして、意義が大きいと考えています。

また、充実した図書環境は、まちの魅力を高める上で欠かせない要素です。つくばエクスプレスが開業した平成17年以降、本市の人口は大幅に増えましたが、これからも人口増を実現するためにも、日本一の読書のまちの施策を継続したいと考えています。

深浦 図書館には図書館独自の機能がありますし、果たすべき役割もあります。多くの人に図書館を訪れたいと思ってもらえるようなイベント

トや施策を、図書館自らが実施することで、結果として、まちのにぎわい創出につなげることができればと考えています。

私は職員時代から市役所や地域の情報化に取り組んできましたが、情報化が進んでも紙の本の重要性が薄れることはないと考えています。GIGAスクール構想の実現に向けた取り組みが進められていますが、読み書きそろばんといった、最も基本的なリテラシーが備わってこそ、デジタル機器は力を発揮します。これからも市民図書館を中心に、子どもたちはもとより、市民の読書環境の充実に努めていきたいですね。

藤井 幅広い年齢層の市民が本に親しめるよう、各都市で多様な仕掛けが講じられていることがよく分かりました。インターネットでさまざまなことが調べられるようになり



ましたが、実際に紙に触れて、五感を使って考えたり、理解を深めたりできるところが、本の良さだと思います。今後、市民と力を合わせながら、誰もが本に親しめる環境づくりを進めていただきたいと思っています。本日はありがとうございました。

(令和3年1月12日、WEB会議形式にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は5月号に掲載予定です。